

写真技法解説

●ダゲレオタイプ Daguerreotype

銀鍍金した銅板上に画像を形成する最初の実用的な写真術。フランスのダゲールが考案し、1839年に発表。この年を一般に写真発明の年とする。よく磨いた銀鍍金板をヨウ素（後に臭素も使用）の蒸気に曝し表面に感光性のハロゲン化銀を生成する。これをカメラに入れて撮影し、直後に水銀の蒸気で現像、続いて定着を行う。撮影した感光板を直接鑑賞する一枚限りの写真である。左右逆の画像は美しく鮮明で、見る角度によりポジにもネガにも見える。日本では銀板写真と通称する。

●カロタイプ Calotype

1840年に英国のタルボットが考案した、紙支持体の感光材料による撮影技法。上質の薄い紙に硝酸銀とヨウ化カリを塗布。撮影前に硝酸銀、酢酸、没食子酸で感光性を増大させ、カメラに入れて撮影、現像、定着を行う。画像はネガ像で、塩化銀紙に密着焼き付けし、数に制限なくポジ像の印画が得られた。その後のネガ・ポジ法の嚆矢である。紙の繊維のため画像はやや鮮明さを欠く。

●コロディオン湿板法 Wet collodion process

1851年に英国のアーチャーが発表し、19世紀後半の30年以上にわたり使用されたガラス板を支持体とした撮影技法。感光物質の媒体としてコロディオン（硝化綿をアルコールとエーテルに溶かしたもの）を用い、極めて鮮明なネガ像が得られた。日本における最初の実用的写真術である。

ヨウ化物・臭化物を添加したコロディオン液をガラス板に塗布してから、硝酸銀の溶液に浸し、コロディオン層に感光性のハロゲン化銀を生成。感光板が薬品で濡れているうちにカメラに装填して撮影する。撮影直後に硫酸鉄や没食子酸で現像、ハイポや青酸カリで定着を行った。

●アンブロタイプ Ambrotype

コロディオン湿板法のネガ像を薄めに仕上げ、背後に黒い布を置いたり、黒いニスを塗るなどして画像をポジ像に見せる技法。欧米ではダゲレオタイプの廉価版として普及した。日本でも一般的で多数の画像が現存する。写真は桐箱に入れて顧客に手渡され、「ガラス写し」などと通称された。

●鶏卵紙 Albumen print

1850年にフランスのブランカール＝エヴラルが考案した卵白を使用する印画紙。紙の繊維を卵白層がカバーするため画像は鮮明である。塩化物を加えた卵白を紙に塗布しておき、使用前に硝酸銀の溶液に浮かべて感光性をもたせたのち、ネガと密着させ日光で焼き付ける。現像を行わず強い光だけで画像が生じる焼き出し印画紙で、焼き付け後に金調色とハイポによる定着を行う。発表されてまもなく、フランスやドイツでは、卵白を塗布した原紙が生産、販売されるようになった。

●ゼラチン乾板 Gelatin Dry plate

乾いた状態で使用が可能な、高感度のガラス支持体の近代的感光材料。乾板と通称する。その後、写真フィルムへと発展する。工業生産された乾板の登場で、写真家は撮影の現場での暗室作業から開放され、感光板を自製する必要がなくなった。その最初は1871年にイギリスのマドックスが発表した臭化銀ゼラチン乳剤乾板で、1878年にはベネットが乳剤を熟成して感光度を高める方法を発表し、まもなくイギリスのスワンなどにより高感度の乾板が工業的に大量生産されるようになった。日本には明治10年代半ばから導入され始めた。

●ゼラチンシルバークロマトタイプ Gelatin silver print

工業的に生産された銀ゼラチン乳剤による印画紙の総称である。塩化銀ゼラチン乳剤による焼き出し印画紙（POP）は1882年にイギリスのアブニーが考案し、乾板時代に広く使われた。

露光後の現像により画像を得る近代的な銀ゼラチン乳剤現像紙の初めは、高感度臭化銀ゼラチン乳剤を支持体紙上に塗布したブロマイド紙で1873年にイギリスのモーズレーが考案した。その後、オーストリアのエダーらにより、1881年には塩化銀主体のゼラチン乳剤現像紙であるガスライト紙が、1883年には塩臭化銀ゼラチン乳剤によるクロロブロマイド紙が考案され主流となった。